

医学部ウォーカー

1面：大谷先生 山形大教授就任他
 2面：三田学務主任インタビュー他
 3面：倫理委員会紹介他
 4面：第29回日本結合組織学会学術大会他
 5面：動物実験施設の現状と将来他
 6面：解剖体慰霊祭 今後の計画他
 7面：大学教員の任期制法案が公布他
 8面：「世界脳神経外科学会賞」を受賞して他
 題字 医学部長 遠藤正彦氏筆

神経科精神科講師

大谷浩一先生

山形大学教授就任!!

平成九年七月十六日付で山形大学医学部神経精神医学講座の教授に就任することになりました。これもひとえに遠藤医学部長をはじめとする医学部の先生方、ならびに兼子教授をはじめとする神経精神科の先生方の御支援のたまものと、この場を借りて心からお礼を申し上げます。

私は昭和五十年に弘前大学に入りましたが、学生時代はばく然と「良い医者にならねば」と考えてはいなかった。あまり勉強せず、学講座の教授に就任することになりました。昭和五十六年に神経精神科に入局してからは心を入れかえて臨床と研究に励んで参りましたが、これも佐藤・福島両名誉教授、兼子教授の御指導・御鞭撻のたまものと考えております。

私は入局と同時に当時助手の兼子先生が進めておられた「てんかん妊娠」についてプロジェクトに参加して頂きました。そこで妊娠中の抗てんかん薬の薬物動態について勉強したのが私と臨床精神薬理学との出会いでした。臨床精神薬理学をさらに深めるために昭和五十九年九月から約一年半スウェーデン・カロリンスカ研究所・フディング病院・臨床薬理学教室に留学させて頂き、薬物動態学、薬遺伝学について学びました。実を言いますと、

帰国後の研究の方針について随分悩みました。悩んだ末、臨床医としてのアイデンティティを大事にし、臨床医としての立場を最大限に活用しようと考えました。日々の臨床から問題を取り上げ、それを解決するために研究を行い、得られた結果をまた臨床に還元しようと考えました。

具体的には抗うつ薬、抗精神病薬、抗不安薬に対する臨床反応の個人差、とくに反応不良者と副作用の発現の原因について薬物動態学的、薬遺伝学的手法を用いて検討し、今日に至っております。

以上のように臨床精神薬理学については深く勉強してきたつもりですが、これからは精神医学全般についてさらに研鑽を積み重ねていきたいと思います。また研究のみならず、地域医療の充実、学生の教育にも力を入れなければなりません。

したがって、今は、むしろ新しいスタートラインに立ちたいと思います。幸い山形大学には弘前大学出身の教授が何人かおられますし、山形県内には同窓会の先生方も多数おられます。これらの先生方に御指導頂きながら、山形大学のために全力を尽くす所存でございます。最後に私をここまで御指導頂いた弘前大学医学部の先生方に

みならず、地域医療の充実、学生の教育にも力を入れなければなりません。したがって、今は、むしろ新しいスタートラインに立ちたいと思います。幸い山形大学には弘前大学出身の教授が何人かおられますし、山形県内には同窓会の先生方も多数おられます。これらの先生方に御指導頂きながら、山形大学のために全力を尽くす所存でございます。最後に私をここまで御指導頂いた弘前大学医学部の先生方に

改めてお礼を申し上げますとともに、遠藤医学部長のもと弘前大学医学部が今後益々発展することを心からお祈り申し上げます。

喜びの大谷先生(右)と兼子教授(左)



国立大学医学部及び同附属病院の法人化・民営化問題について

弘前大学医学部長 遠藤正彦

法人化・民営化問題の経緯
 国立大学医学部の地方自治体への移管という問題は、数年前より国立大学協会等で話題となっていたが、現実的な問題として議論を呼ぶまでに至らなかった。平成八年十一月の政府の行政改革会議の見直し項目の中の文部省関係事項として、国立大学や政府直営事業の民営化という項目があったが、まだこの問題が本格的には議論されていなかった。

しかし、平成九年三月十三日開催の全国国立大学医学部関係会議において文部省医学教育関係の高官が、政府部内において国立大学病院の民営化について緊急に議論されていることを明らかにし、時を同じくして、この問題は自民党行政改革

推進本部での検討事項であることも伝わり、この問題は急速に現実の問題となった。その後、国立大学医学部長会議(平成九年五月十九日)及び全国医学部長病院長会議(平成九年五月二十日)で、それぞれ文部省から本件の経緯の説明があり、医学部長会議ではこの問題に対応すべく「国立大学医学部のあり方に関する委員会」が設置された。

そして、平成九年六月三日財政構造改革会議で発表した「財政構造改革の推進方策」には、「医療提供体制については、大学医学部の整理・合理化も視野に入れつつ、引き続き医学部定員の削減に取り組む。」との旨が明記された。この方針は、財政構造改革法(仮称)として、秋の臨時国会

に提出される予定という。そして、第100回国立大学協会総会(平成九年六月十七日)は、国立大学及び同附属病院の法人化・民営化の問題を正式な議題とした。更に、国立大学長会議(平成九年六月十九日)の席上、文部大臣が、国立大学については、独立機関化または地方移管・民営化について検討の対象とされていることを正式に明らかにした。事は次第に、既定の方針であるかのように動きはじめている感がある。

法人化・民営化問題 浮上の背景
 国立大学及び同附属病院の地方移管、法人化・民営化の問題の浮上は次のような理由によると思われる。
 第一、政府は目下財政再

今後の対応
 したがって当弘前大学医学部がどの様な方向に進むとしても、次のような準備をしなければならぬ。
 一、大学としての力をつけ評価を高めること
 レベルの高い研究論文を可及的に多数発表する、国際会議を地元で積極的に開催する、文部省科学研究費や財団等の公募研究助成を多数獲得する、等により、大学としての評価を高める必要がある。
 二、医学部内の組織の強化
 学部学生のカリキュラム(次ページへ続く)

三田学務主任インタビュー

— 研究室研修と系統別講義の本格的実施に向けて —



大学改革が進む中、六年一貫教育が始まって三年目を迎えた。今年四月から学務主任に就任された公衆衛生学講座三田禮造教授に、主としてカリキュラム面の課題について伺った。

新しいカリキュラムの具体化が徐々に進行して、来年度から研究室研修と系統別講義が実施されることになり、これらは今年中に具体的な計画を立てることが必要となる。

研究室研修と系統別講義
研究室研修は四年生が半年間各研究室に配属され、教官や大学院生について研究を体験する。各講座・部門に対してテーマや受け入れ人数などに関するアンケート調査と指導教官・大学院生を対象とした説明会が行われ、準備が進んでいる。全く新しい試みなので、開始後も計画の見直しが必要と予想される。

系統別講義も明年度から
始まるが、担当講座および教官の構成やオーガナイザー、講義内容などについて具体案を編成し、今年度中に実施計画を整えていく。

臨床医学入門実習
さらに今年度は実施三年目になる臨床医学入門実習（early exposure）の見直しを行い、実施期間・施設などに

多少変更が加えられた。二年間の経験から、この実習は学生に対して貴重な臨床的経験の場を提供して来たことは間違いなく、今後も細かな訂正を加えながら実施して行くことになると思われ。なお、このような実習の一部は医学教育の中ではなく、全ての学生を対象とした、もっと早期の基礎的教育プログラムの組み込まれるべきとの考え方も出てきている。

三田先生には、大学改革の推進役として辣腕をふるっていただきたいと思う。

（佐藤記）

予備審査Q&A

Q：申請の際、論文内容の要旨（二千字以内）は英文でもよいのか？
A：現時点では和文で提出してもらうことになっている。

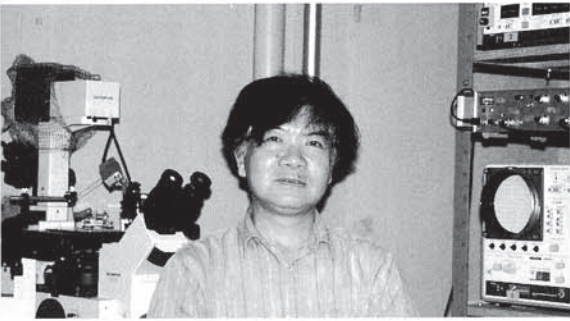
Q：予備審査の時点で論文は完成していなければならぬか？
A：完成していることが望ましいが、細部を除き、論文として基本的な事項が完成されていれば予備審査を受けることができると思われ。また、予備審査は提出された論文をより優れたものにするのが重要な役割であるから、審査後に論文の手直しを要求されることもある。

Q：予備審査会に審査員以外の者が出席はできるか？
A：予備審査会は基本的に公開が原則である。従って、審査される論文に興味を持つ者は教官はもちろん、大学院生、研究生、研修医など大歓迎である。また、予備審査員の許可があれば質問もできる。

（新川記）

共通教育・雑感

生理学第一講座 泉井 亮



共通教育が始まって三年経過しようとしている。今、医学部一、二年生の目が前

にもまして輝いているかどうか、気になる。

「なぜ私が共通教育（教養科目）の講義を担当しなければならないのか。」ということが多くの医学部教官の疑問であったと思うし、今もそう考えている教官は少なくないと思う。「自分は医学が専門の教官なのだから。」

私の考えもはじめはそうであった。教養教育を専門とする教官が教育すること、大学教育の意義があると思っていた。ただその講義をやりたくないと思ったことも事実だが、私が担当したのでは学生の要求を満たさせられないと思ってい

た。しかし、共通教育運営委員（平成七、八年度）をやってみて、その考えが変わった。

毎月ほぼ二回の割合で開かれた関連の委員会を通じて、私は、そもそも大学というところには教養科目を専門とする教官はいないというのを知った。すべての教官が何か特定のことに専門とした研究者であり、それぞれの教官の立場は、医学部で生理学を研究していること、内科学を専門としていること、ならんら変わりでないのである。これまでは、たまたま教養部に籍を置く、それぞれに専門を持った教官がこの教育を担

当していたのである。これに今度は農学や医学を専門とする教官が加わった。これはいいことではないだろうか。何を学び、何を学んだか、その人の教養となるのであれば、学ぶべき対象の選択の幅が広いということ、は、確実にいいことなのだから。やるからには、ちゃんとした講義をしなければ、今は、思う。

それにしても教えるというものは、難しい。講義中でも、私が教えていて、そしてそれを学生が聴いている、と意識して、その場を逃げ出した気持ちはない。教えるというものは一体どういうことなんだろう？

こんなことを思い出す。助手の頃、初めて生理学の講義を担当することになって、その日、極度に緊張

している私に、仲のいい同僚がからかいながら、「わくわくさん、教えるって、どういふことか知ってらっしゃるか？夢を語ることもなだつてサ。」

「へえー。」

彼は私より四歳年下であるが、考え方はずつとおとなである。

「で、わくわくさんはどんな夢を語ろうというわけ？」

「夢なんかはないよ。」

「そう。まあ、しっかりとやってよ。ほくも聴きにゃ行こうか？」

「来るな。」

ますます不安がつる。冗談じゃない。語る夢なんかあるわけがない。今日の100分のために二週間かけて勉強してきた生殖の生理、男性。現実すら十分理解していない。くやしきまぎれに、私、

「じゃー、学ぶってどういうことだい。」

「よく覚えていないけど、誠意を感じるよ、だつたかな。」

「ふーん。」

何がなんだか訳がわからぬままに、講義を終えたが、その後、とてもむなししい気持ちで、三、四日元気がでなかつたことを覚えている。

しばらくの間、学生達ともなるべく顔を合わせないよ、ひっそりと生きていた気がする。

この頃は講義の機会も随分多くなった。相変わらず夢を語るなんてことは、なかなかできない。でも、自分が興味を持って研究している対象であつたら、夢も語れそうな気がする。睡だつてとばしながら話し、自分のイメージする世界に陶酔だつてしそうだ。そのと

きは、誠意はともかく、情熱は感じとってもらえるかもしれない。

しかし、自分にとってあまり興味のない事柄であつたらどうだろう。学生を、それについて自分が描いたイメージの中に誘い込むことが出来るだろうか。話の中心に学生が乗ってくるかどうかは、私が描いたイメージの出来具合によるに違いない。そうすると、私がそれをどう学び、どう理解したかが問題である。おそらく、教えることは、学ぶことの延長線上にあるのだろう。

いつまでも学ぶ人でありたいと思つている。

「わくわくさん、あいかわらず青いね。」

四歳年下の友人のこえが聞こえてきそうだ。

態勢の強化確立
大学外からの恒常的な研究助成を受ける態勢を強化するため、医学部後援会の設立や、民間企業からの恒常的研究助成を受けるための努力が必要である。

国立大学医学部及び同附属病院の地方移管または民営化は、一般的にまだまだ先の話であるとの認識があるようである。

文部省医学教育課長が国立大学医学部長会議の席上「国鉄や日本電電公社の民営化は、何年も議論を重ねた結果として、誰もそんなことは実現し得ないと思つていたところ、わずか一ヶ月のうちに形勢は逆転し、実現された。」という例を引き合いにし、地方移管や民営化は、いつどうなるかについては予断を許さないと発言した。

一方、文部行政には、常にはつきりとした態度を示している国立大学協会が、本件に関して何ら積極的対応の姿勢を示していないことと不安を感じている。

弘前大学吉田豊学長は、国立大学そのものは地方移管や民営化されることはないだろうが、附属病院の民営化を完全に否定することはできないとの見解を示している。

水面下で地方移管・民営化に向かつて着実に進んでいるのかも知れない。我々は、これらのことに関して、医学・医療の将来を考える立場から、もっと積極的発言を繰り返してゆく必要があるように思われる。

倫理委員会紹介

倫理委員会 工藤

人の生命を扱う医学に倫理は避けて通れない重要なことであり、本学の倫理委員会は現在まで積極的に活動している、今回工藤委員長（病理学第二講座）より寄稿を得たので紹介する。

本学の倫理委員会は、この七月の開催で八十五回を数えた。最近の倫理委員会をご紹介し、一層のご理解を願いたい。

委員会の構成
月一回の開催で、開催予

新評議員に

菅原・横山

両教授



菅原和夫教授
(衛生学講座)



横山雄教授
(小児科学講座)

八月から新しい評議員として菅原和夫、横山雄両教授が選出された。評議員は大学の最も重要な審議機関であり、医学部からは両教授のほか遠藤医学部長、橋本病院長が参加される。菅原教授は二期目、横山教授は新任で、任期は二年間。大学改革の難しい時期にあつて両教授の活躍を期待したい。

彦人文学部倫理学教授、堀内健志教授、法医学教授、三浦義弘、盛雲寺住職、三上雅通、護士、基礎教官会議から辻彰子医学部助手、医代会から中村文彦第二外科助手、看護部から石田トミヨ副看護部長、そして、泉井亮第一生理学教授、横山雄小児科学教授、兼子直神経精神医学教授、黒田直人法医学教授、菅原和信薬剤部教授と工藤一第二病理学教授から構成されている。

委員会の方針は、肩書き・年齢にとらわれず、互いのこれまでの人生を尊重した、全く自由な議論をすること、そして、よく聞くこと、理解し易い話をするなどである。委員長はただ議論のつなぎをするだけの役割に過ぎない。

委員会の情景
委員会をより理解していただくため、この七月の第八十五回倫理委員会を述べよう。

七月三十日午後四時から、体外受精胚移植と顕微受精に関する生殖医療関係の審査がはじまった。今日の生殖医療審査小委員会委員長は泉井委員が担当された（横山委員と交代で担当している）。四時半から倫理委員会本会議がはじまる。前回の委員会記録の確認にはじまり、前回の委員会から今日までの一ヶ月の間の学内紙上委員会の結果や外部からの送付資料また参考になると思われる新聞・雑誌情報などのコピー等が回覧あるいは配布される。

生殖医療
今日の議題一は、産婦人科から審査申請された生殖医療の十三例の審査だ。先

渡りよう事務部で準備に入り、実施者はそれを受け実施申請書を提出することに。同時に医学部長へ報告する。同時に医学部長へ報告する。同時に医学部長へ報告する。

生体部分肝移植

議題二は、第二外科から申請された、委員会として第五例目の生体部分肝移植の審査である。各委員へ事前に送付されている資料に基づき、レシピエントとドナーについて、倫理委員会としての立場から議論をする。次いで、申請者の佐々木睦男教授に臨席願ひ、直接、質疑応答を交わす。患者の経済的負担にまで意見が交換される。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

「死の医学」勉強会

議題四は、委員会として勉強を重ねている「死の医学」勉強会で、今回の担当は三浦委員である。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

委員会の特徴

この間、丁度、脳死法案が国会で審議された時期に重なった。しかし、遠回りであつても、各委員交代で講師により、広く「死」を勉強してきたものである。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

復職

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

附属病院

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

このようにして、今回の生体部分肝移植の審査申請は承認された。

人事異動

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 医学部
産科婦人科学 助手
土橋 義房
〈弘前市立病院〉
辞職 9・5・31
脳神経外科 助手
金 奉均
〈黒石病院〉
辞職 9・7・31
神経精神医学 助手
佐々木 俊徳
〈カナダオタワ大学留学予定〉
採用 9・6・1
産科婦人科学 助手
小笠原 智香
〈医員〉
麻酔学 助手
大友 教曉
〈医員〉 | 復職 9・7・4
外科学第二 助手
十束 英志
併任 9・8・1
衛生学 教授
菅原 和夫
〈評議員(継続)〉
小児科学 教授
横山 雄
〈評議員(新規)〉
育児休業 9・7・7
公衆衛生学 助手
木村 有子
〈9・11・13〉 | 附属病院
辞職 9・7・31
耳鼻咽喉科 講師
一條 宏明
〈医院開業予定〉
昇任(転出) 9・7・16
神経科精神科 講師
大谷 浩一
〈山形大学教授〉 | 休職 9・7・15
集中治療部 助手
榑方 哲也
〈更新 10・7・15〉
事務系 9・8・1
管理課 経理係長
渡辺 弥 |
|---|---|---|---|

大学院医学研究科

3年間で修業可能

平成九年一月二十二日開催の研究科委員会において「大学院医学研究科修業年限短縮についての申合せ」が承認された。この制度は平成七年度入学の大学院医学研究科学生から適用される。

一、修業年限短縮の条件

- ① 修了に必要な単位(30単位)の取得
- ② 学位論文が国際的学術誌に筆頭者として掲載、または、掲載が決定されること

二、修業年限短縮の手続き

- ① 大学院医学研究科修業年限短縮について(申請)：指導教授提出
- ② 大学院医学研究科修業年限短縮及び学位予備審査申請書：大学院生提出
- ③ 掲載論文別刷、あるいは掲載証明書と論文原稿：大学院生提出
- ④ 共著者全員の同意書：大学院生提出
- ⑤ 研究の証明書：指導教授提出
- ⑥ 論文要旨(千文字以内)：大学院生提出

月第二回目までの研究科委員会に報告する

四、学位授与認定

- ① 修業年限の短縮が認められ、予備審査に合格した者は、その後、所定の手続きに従って学位論文を提出し審査を受ける
- ② 最終の学位授与認定は、当該年度の三月第一回目の研究科委員会において行われる



(新川記)

遠藤正彦会頭主宰 第29回 日本結合組織学会学術大会 ◆盛会裏に終了◆

第二十九回日本結合組織学会学術大会は六月五日六日の二日間、遠藤正彦会頭(弘前大・医・一生化・教授)のもと弘前文化センターを会場に開催された。この学会は「結合組織」をテーマに生化学、解剖、病理などの基礎医学系と整形、皮膚などの臨床系などの研究者による学術集合であり、発表も多方面にわたっていた。学会前日は、濃霧による青森便欠航の影響で各種委員会の開催に多少混乱がみられたが、遠藤会頭の陣頭指揮により予定よりやや遅れるも無事に終了した。



会頭(遠藤教授)の講演

学会当日の参加者は二五〇名を数え、三会場で終日熱気のこもった発表と討論が行われた。第一日目ではワークショップ「マトリックスマトリックス」が行われた。細胞外マトリックスマトリックスの構造と機能を理解するためには、このマトリックスマトリックスは極めて有用な新分野であり、

近い将来に大いなる期待を抱かせるワークショップであった。午後からは会頭講演「プロテオグリカンの糖鎖工学とその応用的展開」(写真)が行われ、特定の配列にデザインされた糖鎖を持つ人工プロテオグリカンの合成

博士)と、「Regulation and function of BMP-1 and related proteins」(米国University of Wisconsin, Daniel S. Greenspan 博士)による特別講演が行われた。

又、今回は学会として初めての試みであるスポンサードシンポジウム「ヒアルロン酸の基礎と臨床(科研製薬、生化学工業)」と「ビタミンKと骨代謝(エーザイ)」が企画され、原田征行教授(弘前大・医・整形外科)と井上哲郎教授(浜松医大・整形外科)の座長の下で、第一線の七人の先生方から発表がなされ、熱心に討論された。

玉井克人講師(弘前大・医・皮膚科)ら十一名の若手研究者による「基底膜をめぐる最近の話題」と「強皮症をめぐる病態解明」と題する二つのワークショップ、第二日目には第六回大賞受賞講演「XI型コラーゲンa2鎖遺伝子の転写制御matrix of the brain」(米国The Burnham Institute 山口祐

御領域の解析」妻木範行博士(大阪大・医・整形外科)等、極めて水準の高い研究発表がされた。一般演題は、合計六四演題の発表があり、オリジナリティに富んだ演題も多く、各会場で熱心な質疑応答が行われた。次回は和歌山で開催の予定で再会を約し会場を後にした。

学会余録：大会当日、悪天候のため、昼食の弁当の売れ行きがかなりあるものと事務局が推測、大量に購入、販売に及んだが、予想に反し売れ行きが悪く、大量に残った。そこで、スタッフに一人三個のノルマとなり、学会の忙しさとは裏腹に贅肉をつける結果となってしまった。アルバイトの学生は喜んだが、一生化に所属すると何故か肥えるという噂が、ここで立証される事となった。

(第一生化学高垣助教授より棟方取材)

青銀・みち銀の研究助成課題決定



記者会見で挨拶する遠藤医学部長、右は横山教授左は井畑頭取

青銀：臓器移植・医学英語教育研究
青森銀行(梅内敏浩現会長)と医学部(遠藤医学部長)は本年一月二十三日青森銀行本店で医学助成金に関する覚書を取り交わした。毎年継続的に研究助成金として一五〇〇万円を医学部の教育研究の振興を目的に助成される。教授会では運用委員会を組織しアンケート調査などを行い検討した結果、大型プロジェクトとしての臓器移植研究班(班

長：小児科横山教授)と、医学英語教育研究施設(代表者：解剖学第一正村教授)を設置することとなり、七月三十日医学部長室で井畑明男青森銀行頭取より助成金を遠藤医学部長が受け、引き続き記者会見し内容を発表した(写真)。

臓器移植研究班の本年度は肝臓、腎、骨髄・幹細胞移植など八項目のテーマに加え共同研究項目として拒絶反応、移植片対宿主反応などの四項目が、タテとヨ

コ糸の関係で構築され、教室のかべを超えた研究成果が期待される。研究成果は報告書として毎年作成するとともに、研究成果を評価し、新発見の見出された研究項目に対しては重点的に研究費を配分するが、評価によっては班員の交代の可能性が示されており、医学部の研究に対しての姿勢が反映されている。第二回班会議は医学部全研究員に公開で九月下旬に学内で予定されている。

医学英語教育施設Medical English Center (MEC) は英語論文の校閲や、論文著者への直接指導や学会発表などのSpoken Englishの指導を目的とするものであり、当座は解剖学第一講座に置か



(棟方記)

三、修業年限短縮の審査
① 研究科委員会において指導教授が学位論文の説明を行う
② 指導教授を除く教授五名を特別審査会の審査員として選出する
③ 特別審査会は修業年限短縮の審査と同時に学位論文の予備審査を行う
④ 特別審査会の主審査員(審査員の互選により決定)は、審査結果を当該年度の一

平成九年一月二十二日開催の研究科委員会において「大学院医学研究科修業年限短縮についての申合せ」が承認された。この制度は平成七年度入学の大学院医学研究科学生から適用される。

長勝寺における最後の解剖体慰霊祭

平成九年五月二十七日、解剖体慰霊祭が行われた。今回が長勝寺における最後の慰霊祭となったが、その最大の理由は「信教の自由が保証されている我が国の国立大学が解剖体慰霊祭を特定の宗教のもとに行うことには問題がある」とある。従って、来年からは公共の施設で献体された人々への慰霊と感謝の気持ちを表す式典が弘前医学会の主催で行われる予定である。また、



長勝寺に置かれていた納骨堂（写真上）は弘前市霊園に新たに設けられた埋骨施設へ移される予定である。当日、長勝寺では小雨降る中、祭主祭詞（弘前医学会長）、学生甲辞（学生代表）、専門二年生、平沢 薫君の後の、献体された方々のご冥福をお祈りするしめやかな僧侶の読経が執り行われた。引き続き、ご遺族ご焼香（写真下）の他、祭主、附属病院長、ご来賓、



部局長、職員、学生の焼香が行われた。

解剖実習は医学生が最初に行われる。直面する最も基本的で重要な医学教育の一つである。この実習には献体された方々の崇高なご遺志とご遺族のご理解によって成り立っていることを肝に銘じなければならぬ。

（新川記）

動物実験施設の現状と将来



神谷 晴夫教授

り方について施設長の神谷晴夫教授（寄生虫学）にお話を伺った。

「遺伝子操作動物を用いた研究が盛んになるなど、実験動物も変貌を遂げてきましたね。」
「大学によつては、飼育動物の七〇〜八〇％を遺伝子操作マウスが占める所が出てきています。ここでは、平成七年度の追加予算で、五階の感染実験室を整備し、それ以外のスペースを遺伝子操作マウス飼育室に当てています。今後遺伝子操作動物が増加することが必至

です。施設整備の面で対応して行かなくてはなりません。もうひとつ、イヌ・ネコ・サルの供給の問題があります。特に動物福祉の点から考えますと、これら動物の使用にあたっては、実験者が各方面からの批判に耐えられるような実験を行う必要があります。現在、これらの動物の繁殖・安定供給を全国レベルで考える方向が検討されています。」

「遺伝子操作動物の作成や動物福祉を考える場合、実験者の倫理感が問題になりますね。」
「その通りです。医学部を卒業した多くの方が動物実験を伴った研究に携わるわけですから、医学部のカリキュラムに実験動物学あるいは実験動物医学の講義を加え、学生時代に動物実験に関する基礎と倫理を学ぶ必要があると思います。」

「昨年の動物慰霊祭にお話をいただいた前島先生の居られる慶応義塾大学医学部などで行われています。東北地方では山形大学医学部です。カリキュラムに組み入れられています。」

「研究の進歩に施設が対応して行くためには、予算面が重要になりますね。」

「施設が建てられて十五年も経ちますとハード面の改修が必要となります。たとえば、空調設備の故障が多くなりまして、空調設備の改修を今年度の概算要求で出していたいただきました。長崎大学医学部附属動物実験施設では、その更新が認められませんでしたので、期待したいところです。」

「しかし、電気代、上下水道代、人件費、空調設備修

理費等、いわゆる施設そのものの維持費が、全必要経費の約八〇％を占めます。このことは、施設の維持費の面で利用者に大きな負担をお掛けしていることを示しています。従来から要望してきておりますように、学部の他の建物と同様に、この部分を学部で負担していただければ、現行の使用料の大幅値下げすら可能です。」

平成八年度から、文部省より配分になっております動物実験施設経費、実験動物経費等が学部で節約充当対象となり、減額配分されるようになってきました。

一方では、国立大学医学部部長会議、動物実験施設協議会では、これら経費の増額を要望していますが、現実には益々厳しい状況になってきています。

また、学部内で見直しが進んでいる特殊装置維持費を含め、予算の傾斜配分という点を考えますと、動物実験施設が、いかに利用度が高く、そこからどのような成果が得られているかという点を示す必要があります。施設を利用して書かれた論文には、その点を明記していただき、実績を積み上げることで、予算面での改善につながるものと思えます。今年度には動物実験施設報告書の第四号を出す予定です。

二十一世紀になっても動物実験が無くなることはありませぬ。動物実験施設を発展・維持するためには皆様のご理解とご協力が必要です。宜しくお願いたします。」

（中根記）

医学部図書館便り

本年度の目玉

図書館の利用で最も頻度が高いのは、文献検索でしょう。各教室から直接Medlineへ、待ち時間無くアクセス出来るようにすることが本年度第一の課題です。それが可能になりました。また、current contentsも、近々、可能になる予定です。利用方法は、ホームページを開きますとお分かりと思います。お分かりにならないときは、どうぞ図書館へご連絡下さい。

購入図書・雑誌の見直し

予算とスペースを最大限生かすため、購入図書・雑誌の見直しが、図書委員会で行っています。講座・部門での購入と重複する雑誌は極めて共通的なものを除いて医学部図書館の購入は中止します。従って、講座・部門で購入雑誌は可能な限り継続をお願いします。そして、ある期間を経て図書館での管理へ移行することを考えています。長い目で見れば収書とその管理は現在の水準を維持出来ることになりす。未解決の問題はまだまだありますが、最

も大切な教育と研究のより以上の推進の一点に立てば問題解決は難しいとは考えておりませぬ。図書館のみで購入している雑誌の見直しは多分困難を極める事と思えます。ご協力願うこと多くと思えます。宜しくお願いします。余力は、医学部図書館の電子化へ可能な限り投入します。

医学部分館の現状を知りたいとき

医学部図書館の現状をお知りになりたいとお考えの節には、どうぞこのホームページにお立ち寄り下さい。まだまだ不十分なものが、図書館からの連絡なども含めて全てホームページを利用してお伝えします。日々更新の態勢を整えているところですので、どうぞ、図書館へ足を運ぶ前に医学部図書館ホームページを覗いて下さい。目的の雑誌が講座・部門を含めて何処にあるかも分かります。図書委員会の内容なども利用者が直接目にする事が出来るようになるでしょう。ご遠慮のないご意見をお待ちしています。メールの受信箱

近い将来の医学部図書館

冊子体の収集・管理については前に述べましたので繰り返しません。大事なのは、今と近いこれからの図書館のあり方です。図書委員会に於いて大きな課題です。それを十分自覚し図書委員会で議論しております。

工藤 二

解剖体慰霊祭関連について 今後の計画とともに

歴史的経過と現状から 将来の展望について述べる

解剖体慰霊祭検討委員会 工藤 一教授

これまでの経過

ことの始まりは、十数年前、国の施設である国立大学が行う解剖体慰霊祭が特定の宗教下で持たれていることへのたびたびの批判でした。信教の自由は日本国憲法で謳われています。多数・少数の問題ではありません。

本学の解剖体合同慰霊祭の主催を医学部から弘前医学部へ変更するとともに、教授会に「解剖体慰霊祭あり方検討委員会」が組織され議論が重ねられて参りました。委員長も永井一徳・福島裕名教授から工藤へと替わる長期の検討でした。

全国医科系大学の調査・白菊会会員へのアンケート調査などを踏まえ、委員会として得た結論は、特定の宗教に依らない慰霊と感謝の式典とする、とのことでした。

しかし、この実現には、現在大学納骨堂は長勝寺境内にあり、お世話になっている事実を基本的に解決し、公的施設へお移しする事無くしては大きな矛盾を抱えつつけることとなります。長勝寺の深いご理解を頂きました。また、弘前市では市霊園使用に関して条例改正して協力下さいました。

平成八年、新委員会は毎週定期的に持たれ、国の予算措置の具体化について議論を精力的に重ねました。そして、必須の施設建設から取りかかりました。

埋骨施設の完成

先にご報告した基礎校舎内の本建築内に短期納骨施設（安置室）が完成し、ついで、今回お知らせします埋骨施設（お墓写真）が弘前市霊園に完成しました。

お墓はアツプルロード沿いの弘前市霊園内の一番高いところにあります。決して豪華なものではありません。六×三メートルの敷地には白玉砂利が敷かれ、自然石の主碑と副碑が配されています。

副碑には献体を決意された折に詠まれた歌「生涯をのぞんで止まぬまなび舎の門いま入る吾はうれしく」が刻まれています。この歌は解剖実習の冒頭紹介すると聞いております。また、次に来る後輩がご遺骨で苦労することのないようにとの配慮も委員会で議論されており。

彼方の岩木山に面し、津軽の野面を一望できる場所です。白菊会ご遺族で同窓である方から、「簡にして粗ならず」との印象を頂き、委員会の意図が表現されて

いることを喜んでおります。このように、多くのご厚意の上に完成しました。

大学納骨堂の解体

このお盆過ぎから、長勝寺境内の大学納骨堂の解体とご遺骨の改葬に移ります。慰霊の刻まれた石板や献体の碑・ベンチ・植栽等一切破棄しません。後に記す慰霊碑に組み込む予定です。

場所を移るにしても、慰霊と感謝の念は継続なので



お墓と長期納骨施設が一体となっておりません。しかし、市霊園では上屋式建造物は認められていません。分離せざるを得ませんでした。市霊園内に市の特別なご配慮を頂き敷地は確保しました。お年を召した方も容易にお参りできる場所であり、大学の新墓所も山手に望める場所です。

慰霊碑を中心とした街角広場の建設計画

次に、慰霊碑の建設についてお知らせします。建設場所は、基礎構内西北端の在府町角で大黒松のある一角に落ちつきました。

長勝寺に今ある「献体の碑」を組み込んだ慰霊碑にすることまでは決定されていますが、どのようなものにするのかはまだこれからです。

アイデアを是非お寄せ下さい。この一角の在府町の道路側の角地を街角広場のコーナーとして、慰霊碑と一体化した小さな憩いの広場を構想しています。緑化委員会とともに進めています。中根緑化委員会委員長と人文学部の地主教授に相談に行ったり、市の企画課に行ったりの結果、将来の弘前市をさまざまの点から話し合っている「創生塾」に出会いました。創生塾の方もわれわれの構想に大変興味をもたれ、その具体化の話し合いを進めている最中です。

この秋までに話し合いの構想を煮詰め、出来るだけ意見を取り入れた設計を雪の期間にし、来春の花見の頃には道路側に小さな広場を実現したいと思っております。開かれた大学の名を昨今

良く耳にします。いろいろな方面の方々とこの件で話し合うその過程こそ「開かれた」の内容のある面を実行しているのでしょうね、と中根委員長と話すことがあるのです。

この街角広場建設には、合併記念としてみちのく銀行からの寄付金の使用を教授会は認めてくれました。一方、慰霊碑はそもそもわれわれ自身の気持ちの結果の表現です。従って、慰霊碑建設には、募金協力をお願いすることになると思っています。手続きを踏み、そのようになりまして何卒ご理解とご協力をお願い致します。

長期納骨施設建設も資金はゼロからです。長期納骨施設建設には比較的期間的余裕がもてます。学部や附属病院として、記念の年の事業としてご配慮願いたい、と考えています。

新解剖体慰霊祭
このような一連の解剖体慰霊施設の新設と移転をもって、はじめて解剖体合同慰霊祭を新方式で持てることとなります。実習を終え火葬されたご遺骨を出来るだけ早くご遺族のもとへお帰り頂けるように、慰霊祭の時期をこれまでの春から秋へ変更します。場所は市文化センターを考えています。そして、式典内容はいま委員会でご検討しております。当初からたずさわったものとして、最も思うことは、お骨もさまざま「人生」があることを改めて知ったことです。生き残る者の反映なのでしょう。

解剖体慰霊祭の見直しからはじまった関連施設は、まだまだ終わってわけではありませんが、経過と現段階の様子をお知らせ致します。一層のご指導をお願い致します。



薬理学実験を見学する高校生達

学部説明会 開催される

8月18日13時から医学部説明会が開かれ、高校生54人（岩手県2人と大阪の高校から1人を含む）の参加があった。当日は学部長の挨拶に続いて学部説明、模擬講義、手術部・検査部・薬理学実験の見学などがあり、参加者のアンケートの結果は極めて好評だった。（佐藤 記）

弘前医学会総会 黒石にて開催される

第八十一回弘前医学会総会が六月二十一日黒石市スポカール黒石にて開催された。総会長は伊藤弘南黒石医師会長。当日は、午前十一時から総会長と速藤正彦弘前医学会長の挨拶に始まり、一般演題四十三題の発表と、臨床検査医学講座の保嶋実教授による特別講演「高血圧診療の問題点」が行われた。

平成十年の第八十二回総会はずつ市で開催されることになっており、また、十一年の第八十三回総会は八戸市での開催が決定された。



演者

特別講演中の保嶋教授

「3例目の生体肝移植の経験から」

第二外科 佐々木 睦男

平成九年七月八日、本県在住の十三歳男子に対し、三十八歳の母親からの生体肝移植を実施する機会に恵まれました。この患者さんは本院小児科横山雄教授ならびに青森県立中央病院小児科安保、立花両先生より御紹介頂いた方です。五月二十九日の倫理委員会への申請後、六月六日に倫理委員会、また七月四日に実施検討委員会で承認という素早く対応して頂き、手術までは極めて順調に事を運ぶことが出来ました。手術当日は麻酔科、整形外科（マイクローサージャー）、第一外科肝移植グループ、

更に看護部、手術部、輸血部、検査部、薬剤部、事務部等々病院全体の御協力の下に約十七時間を要しましたが無事終了できました。八月十八日現在、術後四十一日目になりますが、拒絶反応も経験されず、極めて元気に経過中です。本症例につきましましては一部報道されました如く、レシピエントの血管病変が著明であり、我々の予想をはるかに超えるものであります。したが、マイクローサージャー1担当医と我々が協議対応して乗り切ることが出来ました。この事例により各症例毎に全く異なった困難

さのあることを再認識させられた反面、移植はチーム医療であることを改めて感じた次第であります。尚、最後に一言申し添えたい事として、当科では移植手術中であっても救急患者に対応出来る様にチームを編成しておりますので、緊急手術を要する患者が発生した際には御相談頂きたいと思っております。第三例目の経験例の御報告に際し、御協力頂いた全ての方々へ深く感謝申し上げます。

4例目「胆道閉鎖症」
4例目は九月一日に実施し初

大学教員の任期制法案が公布

昨今マスコミ等で話題になってきた「大学教員等の任期に関する法律（法律第八二号）」が平成九年六月十三日に公布された。本法律の目的は第一条に、大学教員について各大学の判断で、任期制を導入できるようにし、教員の流動性を高め、大学の教育研究を活性化させることと規定している。また、第四条には、任期制を定めることができ

るのは①多様な人材の確保が必要な教員研究組織の教員とする場合（流動型）、②主として研究を行う助手の職に就ける場合（研究助手型）、③特定の計画に基づき期間を定めて教育研究を行う職に就ける場合（プロジェクト対応型）と示されている。法令上は大綱的事項のみを規定しているだけであり、具体的な取り組みについては、規則も含めて各大学で定めることとされているところから、去る四月二十三日開催の教授会で教官任期制度検討委員会の設置が認

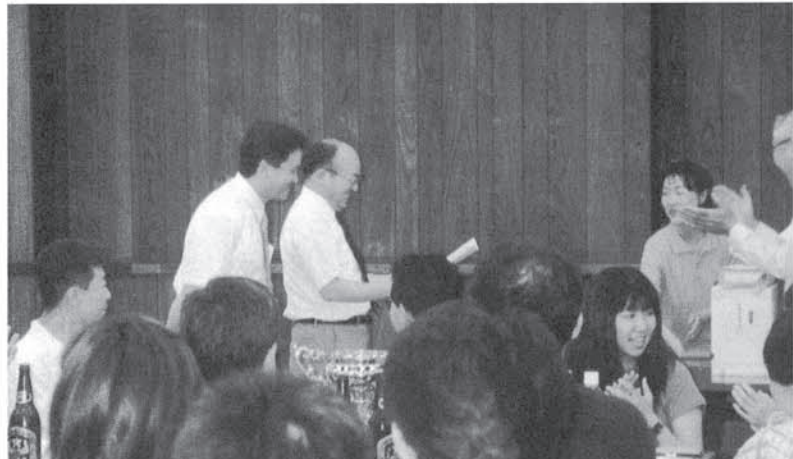
められた。構成は教授会より七名、基礎教官会議及び医局代表者会議より各二名ずつの計十一名からなり、委員長には遠藤医学部長が選出された。この構成から明らかのように今後は、若手教官からも幅広く意見を求めることにより、学部活性化に向けた実りのある話し合いが行われていくことになるものと思われる。アメリカの研究組織をイメージして作られた本法律が明治時代より営々と構築されてきた日本の研究システムに適用していくのか、教員の業績評価の在り方として評価は誰がどのような方法で行うのか、再任決定は誰が行うのか、異議申し立ての機関はどうするのか、更には公務員関連法や労働関係法との関係等、国の制度面における法整備が図られる必要がある、これらを含めた必要の措置について検討すべき課題は多い。教官任期制度検討委員会では、月二回位のペース

医学部長杯争奪ソフトボール大会

—第二生化・第二病理連合チーム優勝—



最優秀選手に選ばれた田中先生（第二病理）、遠藤医学部長との喜びのツーショット



表彰式（医学部会館にて）

優勝	第二生化・第二病理連合	5勝0敗（+34）*
第2位	衛生・公衆衛生・寄生虫連合	3勝2敗（+16）
第3位	第一生化	3勝2敗（+13）
第4位	第一生理・第二生理・薬理連合	2勝3敗（-5）
第5位	細菌・法医・病態生理連合	1勝4敗（-10）
第6位	事務部学務課	1勝4敗（-22）

※得失点差

☆ 最優秀選手 田中正則 先生（第二病理）
☆ 優秀選手 川口 将 先生（公衆衛生）

基礎教職員・事務職員・大学院生が参加し、恒例の第十九回医学部長杯争奪ソフトボール大会が、六月九日から七月十日にかけて、南塘グラウンドで行われた。試合は午後十二時から一時までの一時間に限定され、熱戦が繰り広げられた。今年には生化学第二講座・病理学第二講座連合チームが全勝で優勝した。全試合が終了した七月十日午後五時から医学部会館で、表彰式が執り行われ、遠藤医学部長より各チームに医学部長杯・賞状等が手渡された。その後は試合に劣らず賑やかに打ち上げが行われた。（中根記）

	第二生化 第二病理	衛生 公衆衛生 寄生虫	第一生化	第一生理 第二生理 薬理	細菌 法医 病態生理	学務 事務
第二生化 第二病理	○ 7-4	○ 17-3	○ 15-4	○ 6-1	○ 13-12	
衛生 公衆衛生 寄生虫	×	×	○ 10-4	○ 2-1	○ 15-2	
第一生化	×	○ 12-11	○ 7-4	×	○ 12-9	
第一生理 第二生理 薬理	×	×	×	○ 11-3	○ 12-5	
細菌 法医 病態生理	×	×	○ 17-11	×	×	
学務 事務	×	×	×	×	○ 14-12	



「世界脳神経外科学会賞」を受賞して

脳神経外科 関谷 徹治

このたび「医学部ウォーカー」編集部から、私どもの今回の学会受賞について一文を書くようにとの御指示を頂きました。本紙の読者は医学部関係者のみならず医学部学生も含まれるということ、脳神経外科というものの一端を知っていただくよい機会にもなると考えて借越ながらお受けしました。

今回、私どもが頂きました賞の正式な名称は、「The Volvo Award for Central Nervous System Injury Research 1997」です。世界脳神経外科学会が四年に一度の総会ごとに授与する学会賞には、多様な脳神経外科の分野をカバーするために、いくつかの部門が設定されており、本賞はそのうちの神経外傷部門の賞で、世界脳神経外科学会の神経外傷部門委員会が選考にあたりました。今年の学会は十一回目で、オランダのアムステルダムで七月六日から十一日までの六日間開催され、授賞式に出席して参りました。

上述した「神経外傷」という言葉は聞き慣れない言葉かもしれませんが、一般的には交通事故や労災事故によって衝撃を受けた結果、脳や脊髄が損傷される状態を考えていただければ分かりやすいと思います。しかし神経外傷は、交通事故だけに限らず、交通事故ではありません。我々脳外科医が日常行っている脳の手術も、見方を変えれば「神経外傷との戦い」であるとも言えます。現在の脳神経外科の手術は、手術用顕微鏡という特殊な顕微鏡を用いて慎重に行われますが、脳内では、ミリ (mm) のレベルで

は、ミリのレベルで手術が行われています。そこで重要なこととは、病巣（たとえば脳腫瘍など）を取り除く時に、まわりの正常な神経組織を損傷しないということ、つまり、正常神経組織に新たな神経外傷を作らないということ、つまり、しかしこれは大変難しいことです。現在、手術を取り巻く環境は日進月歩で、様々のハイテク機器を駆使しながら手術をしておりますが、それでも最終的には「人間の手」で手術がなされているという事実には、脳神経外科の歴史が始まって以来、全く変化がないのです。この最後の部分にだけは、まだコンピュータさえ入り込めておりません。

と平行して走行している前庭神経という神経から発生しますが、最終的には蝸牛神経も障害されて次第に耳が聞こえなくなります。この脳腫瘍を手術するとき、もし患者さんに少しでも聴力が残っている場合、これを残すように努力します。しかし、実際には、腫瘍を摘出する手術操作そのものが、かろうじて残っている蝸牛神経線維に対して神経外傷を加えることになり、残っていた聴力までも失われてしまうことが多いという現状があります。また、この同じ聴神経腫瘍が両方の耳に発生することがあります。これは現在では neurofibromatosis II (NF2) と呼ばれ遺伝子レベルでの説明が進んでいる病気で、この病気が持った患者さんは両方の耳が次第に聞こえなくなり、やがて「聾」という状態になります。しかもこの病気が若い人に多く発生します。図1Aに示したのが、我々が経験した若い女性の症例です。頭蓋内の蝸牛神経がある部分、つまり「小脳橋角部」という場所に大きな脳腫瘍が両側にあるのが分かります（矢頭で示しています）。この患者さんは、耳が聞こえにくくなったということと歩けなくなりました。

受診しました。歩けなくなった原因は、小脳と脳幹が極度に圧迫されていることによると考えて手術をしました。図1Bには、両方の腫瘍が全部摘出されたことが示されています。この患者さんは、術後完全に歩けるようになって、現在、元気で外來に通って来ておりますが、やはり聴力が術後少し落ちました。しかし、自動車のクラクションなど大きな音は聞こえるので、聴力が残ったことが、この

患者さんにとって大きな助けになっていきます。しかし、通常、このような大きな腫瘍を摘出すると、まず100%近く完全な聾となります。以上のようなことから、何とか聴力を温存する方法はないか、さらには、これはまだ希望の段階なのですが、一度落ちた聴力を少しでも改善するような方法はないものか、などと私たちは考えるようになりました。

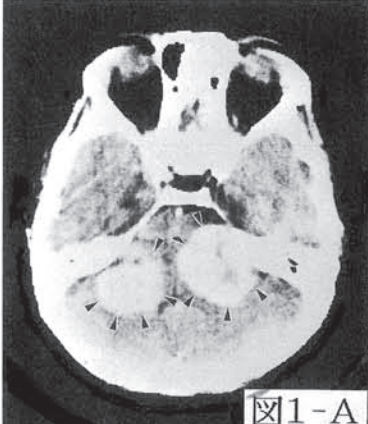


図1-A

図1-B

しかし、現状では、外傷を受けた蝸牛神経に、どうにかということが起こっているのかということさえまだ完全には分かっていないのです。このように、従来、この方面の研究が進展しなかった原因の一つに、蝸牛神経を再現性よく損傷できるような実験モデルがなかったということがあります。モデルがないので病態の解明も充分にはできなかったわけですが、また、この種の実際では数をこなす必要があるのですが、取り扱いは面倒で大きな実験動物は適当ではありません。今回我々が幸運にも学会賞を頂いたのは、ラットという小さな実験動物の小脳橋角部において、蝸牛神経損傷を再現性よく作成する方法を確立した点が評価されたのではないかと思います。

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

蝸牛神経が損傷されることにより、蝸牛神経は脳神経外科の日常診療上、大変重要な脳神経であると言えます。それは、「聴神経鞘腫」という脳腫瘍によって蝸牛神経が障害されることがしばしばあるからです。正確には、この脳腫瘍は、内耳道内を蝸牛神経

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

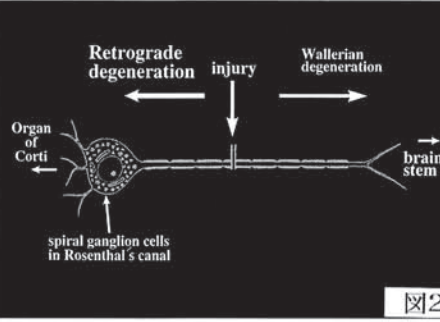


図2

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

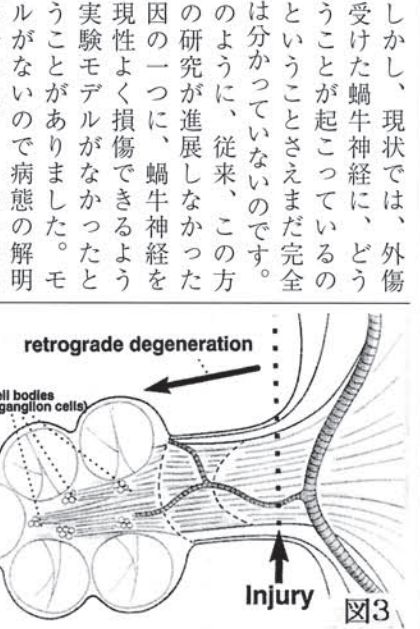


図3

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

蝸牛神経のニューロンを小脳橋角部の部位で損傷すると、神経変性がラセン神経節細胞の方向にも向かって進んでいきます。これを Waller 変性（retrograde degeneration）と呼びます（図2、3）。この逆行性変性によるラセン神経節細胞数の減少に着目することによって、蝸牛神経の損傷を定量的に評価

編集後記

6月18日、吉田学長、石戸谷鵬校会理事長ご臨席の中、医学部ウォーカー創刊記念祝賀会が開かれ、広報委員会委員の労をねぎらっていただいた。面はゆい感じであった。それに発奮したわけではないが、医学部改革の中、第二号は紙面が八ページに増えた。

大谷先生の山形大教授就任はめでたい限りである。委員会全員一致でトップ記事とした。関谷先生の受賞も然りである。将来はこのような吉事が日常茶飯事になることを願う。

国立大医学部・附属病院の民営化・教官の任期制など、大学人として安穩としていられない時代であることとをひとり一人が自覚しなければならぬ。

受験生が偏差値に縛られると同様、研究者が自分の論文のインパクトファクターに一喜一憂する時代である。偏差値教育の中、犯罪の低年齢化が進むと、心の貧しい研究者が闊歩する時代になるのが、一方の心配である。

我々の試みはまだ端緒にすぎたばかりで未解決の問題も多く、今回の学会賞は一種の励ましの意味で頂いたのであると考えております。この研究に関しては、かれこれ五年間ほど試行錯誤を繰り返してきましたが、この間の鈴木重晴教授をはじめ、共同研究者の協力に深く感謝しております。また、これまで研究が事実上可能であったのは文部省科研費によるところが極めて大きく、文部省の御援助にも深く感謝しております。

編集会議風景

